

第3章

食育推進の基本的な考え方

1 計画の基本理念

「食」は私たちが生きていくために欠かせない、最も重要なものです。しかし、「食」を取り巻く環境は、社会情勢やライフスタイル、または個人の嗜好など、時代の流れの中で大きく変化し、私たちの健康や暮らし、さらには社会経済活動にも様々な影響を及ぼしています。

そこで、本市では、「食育」を生涯にわたるテーマとし、食を通じた健康づくり、豊かな心づくり、環境づくり、食の情報発信とネットワークづくりの4つの目標を掲げ、家庭や地域、学校、事業者などのあらゆる場で「食育」の実践を進めるため、「みんなで楽しく学び・はぐくむ・食育のまち へきなん」を基本理念と定めます。

基本理念

みんなで楽しく学び・はぐくむ・食育のまち へきなん

市民が、生涯にわたって生き生きとしあわせに過ごすには、心身ともに「健康」であることが基本です。この健康を維持していくためには、すべての市民が「食」を楽しく学び、「食」についての意識を高め、「食」に関して適切な判断力を身に付けることが大切です。

本市では、温暖な気候と風土に適した食文化を地域特性として活かした「食育」を進め、みんなで楽しく学び、育てることをスローガンに、食を楽しみ、健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことを目指します。

2 計画の基本目標

1 食からの健康づくり

栄養の偏りや不規則な食生活が健康に影響を及ぼしているため、バランスのとれた食事への改善など規則正しい食生活の実践を進め、健康の維持、増進、メタリックシンドロームの改善を図るとともに、食品の安全性に関する理解の促進を目指します。

2 食を通じた豊かな心づくり

食を通じた親子のふれあいやしつけの欠如が、コミュニケーション能力の低下や心の不安定さに影響を及ぼすことから、料理や家族団らんの機会を通じた楽しい食の確保及びしつけや家庭教育による食に関する感謝の念や理解の醸成を目指します。

食の欧米化や海外依存が風土に適した地場食材や郷土料理等、食文化の衰退を招いていることから、日本型食生活の再認識と食料の確保を促進するとともに、地産地消・旬産旬消を推進し、地域固有の食習慣、食文化の継承を目指します。

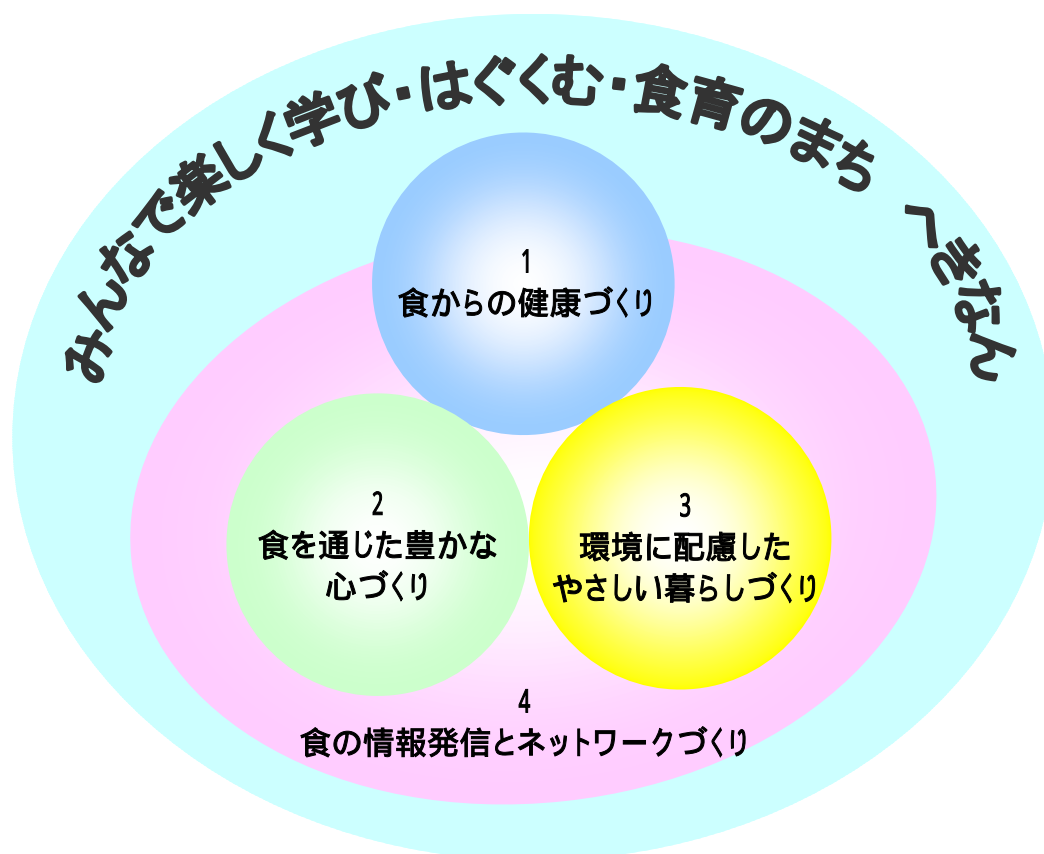
3 環境に配慮したやさしい暮らしづくり

食料の生産は自然の恩恵の上に成り立っており、食べ残しや食品の廃棄などを減らし、地元でとれた食材を地元で消費する“地産地消”や生産においても環境に配慮することなどによって、食から生じる環境への負荷を軽減する必要があります。生産者や事業者による食の安全の確保はもとより、自然環境や生活環境に配慮した食生活の推進を目指します。

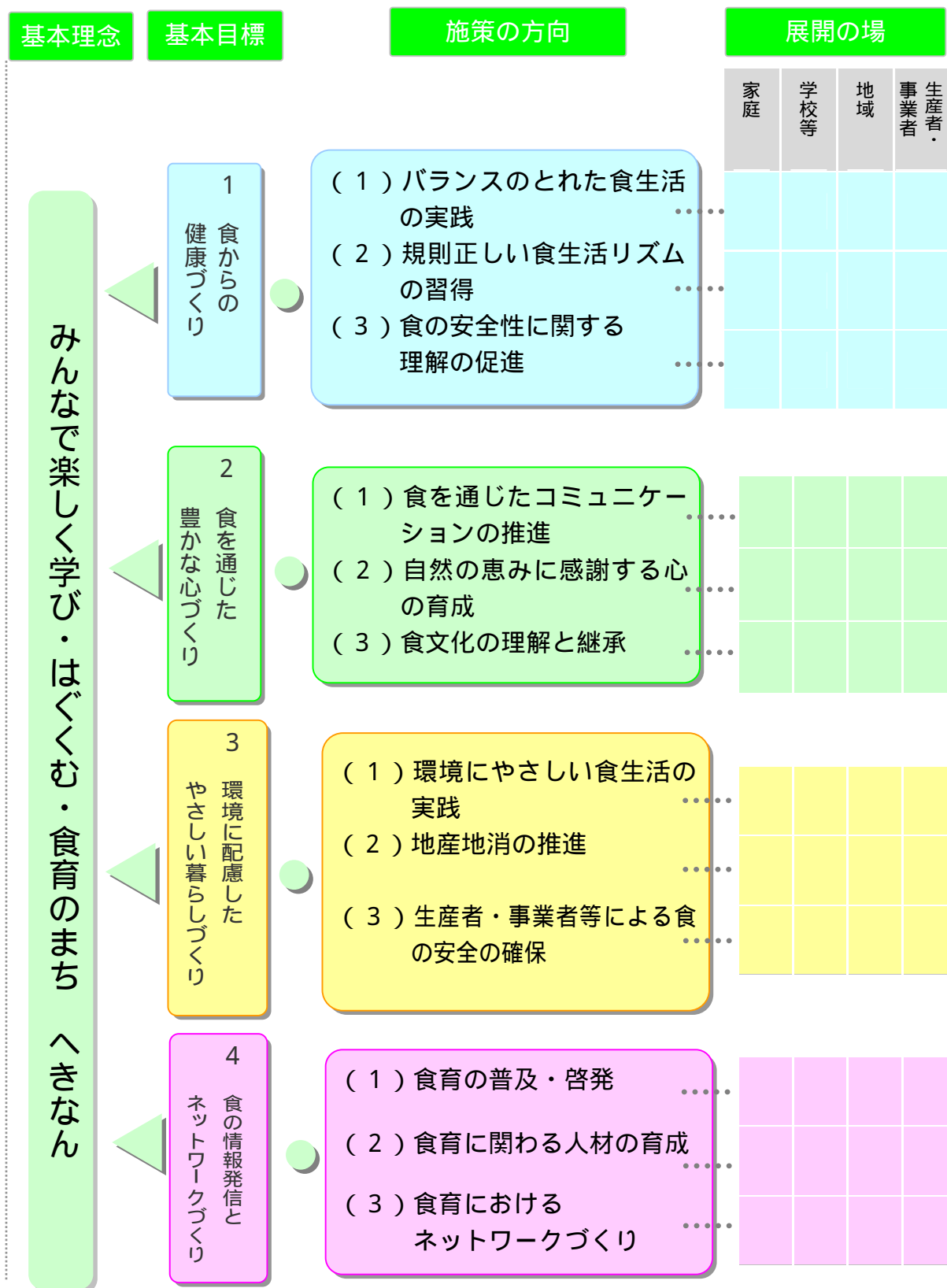
4 食の情報発信とネットワークづくり

食育は様々な分野にわたる取り組みであるとともに、市や関係団体等多くの関係者が一体となって取り組んでいくものです。また、市民一人ひとりが主体的に取り組むことを目指します。

また、食育をより効果的に推進するため、関係者との連携を図り、食育の普及・啓発、食育に関わる人材の育成、食育のネットワークの構築を目指します。



3 計画の体系



4 計画の数値目標

食育を推進していく上で、基本目標を達成するため、平成 23 年度までに達成すべき具体的な数値を掲げ、施策を展開するとともに、成果や達成状況を客観的な指標により把握できるようにします。

(1)「食からの健康づくり」の数値目標



- 朝食の欠食割合の減少
- 「食事バランスガイド」の内容を知っている市民の割合の増加
- メタボリックシンドロームの認知割合の増加

朝食の欠食

20、30 歳代の独身男性は、年代別に比較すると最も朝食を食べない年代です。20、30 歳代の独身男性は不規則な生活になりやすく、今後も朝食の大切さを伝える必要があります。

また、心身ともに成長期にある児童、生徒において規則正しい食習慣を身につけること、特に朝食を摂ることは重要です。

児童・生徒、20、30 歳代の男性の朝食を欠食する人の割合を減少させます。

「食事バランスガイド」の内容を知っている人の割合

質や量をバランスよく食べることは重要であり、バランスのとれた規則正しい食生活を実践するためには、食に対する意識と知識を深めることが重要です。その意識を高め、実践していくうえで、「食事バランスガイド」の内容を知っている市民の割合を増加させます。

メタボリックシンドロームの認知度

メタボリックシンドロームは食生活などの生活習慣の乱れから発症することから、先ずメタボリックシンドロームに対する理解を深め、その予防に取り組むことが重要です。メタボリックシンドロームを知っている市民の割合を増加をさせます。

朝食欠食率

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
3.6%（小学生）	0.0%（小学生）
9.1%（中学生）	3.0%以下（中学生）
13.3%（高校生）	5.0%以下（高校生）
20.6%（男性 20 歳代）	15.0%以下（男性 20 歳代）
19.5%（男性 30 歳代）	15.0%以下（男性 30 歳代）

小学生は 5 年生、中学生は 1 年生、高校生は 1～3 年生

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

< 参考・国の指標 >	小学生 4.1%（平成 12 年度）	0.0%（平成 22 年度）
	男性 20 歳代 29.5%（平成 15 年度）	15.0%以下（平成 22 年度）
	男性 30 歳代 23.0%（平成 15 年度）	15.0%以下（平成 22 年度）
< 参考・県の指標 >	小学生 2.9%（平成 17 年度）	0.0%（平成 22 年度）
	中学生 6.1%（平成 17 年度）	3.0%以下（平成 22 年度）
	高校生 8.6%（平成 17 年度）	3.0%以下（平成 22 年度）
	男性 20 歳代 11.6%（平成 16 年度）	10.0%以下（平成 22 年度）
	男性 30 歳代 15.2%（平成 16 年度）	10.0%以下（平成 22 年度）

「食事バランスガイド」の内容を知っている市民の割合

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
53.8%	60.0%以上

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

< 参考・国の指標 > 58.8%（平成 18 年度） 60.0%以上（平成 22 年度）

メタボリックシンドロームの認知度

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
79.8%	83.0%以上

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

< 参考・国の指標 > 77.3%（平成 18 年度） 80.0%以上（平成 22 年度）

(2) 「食を通じた豊かな心づくり」の数値目標



朝食を家族と一緒に食べる市民の割合の増加
食に関する体験（農業・菜園など）をしたことのある市民の割合の増加

朝食を家族と一緒に食べる市民の割合の増加

食を通じたコミュニケーションの基本となる場は家庭です。子どもは家族と一緒に食事を食べることを楽しいことと感じています。朝食を家族と一緒に食べる市民の割合を増加させます。

食に関する体験（農業・菜園など）をしたことのある市民の割合

農業体験を通じて、食物を育てる難しさ、大変さ等を知ることができます。食に関する体験活動の充実に努め、自然からの恩恵や生産者等への感謝の気持ちを育む必要があります。

食に関する体験（農業・菜園等）をしたことのある市民の割合を増加させます。

朝食を家族と一緒に食べる市民の割合

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
82.8%（小学生）	90.0%以上（小学生）
60.1%（中学生）	80.0%以上（中学生）
66.7%（成人）	80.0%以上（成人）

小学生は 5 年生、中学生は 1 年生
 資料：碧南市食育に関するアンケート結果

<参考・県の指標> 62.3%（平成 16 年度） 80.0%以上（平成 22 年度）

食に関する体験（農業・菜園など）をしたことのある市民の割合

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
35.2%	40.0%以上

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

(3)「環境に配慮したやさしい暮らしづくり」の数値目標



学校給食における碧南産農産物の使用割合の増加
食品の安全に関する知識を持つ市民の割合の増加

学校給食における碧南産農産物の使用割合

地域における食事の機会を通じ、その地域の人・文化及び産物を知ることができます。そのため、地場産物や旬を知って食事に取り入れるなど、地産地消を進める必要があります。

学校給食における碧南産農産物の使用割合を増加させます。

食品の安全に関する知識を持つ市民の割合

食の安全に関する知識を得て意識を高め、豊かな食生活を送ることが必要です。

食品の安全に関する知識を持つ市民の割合を増加させます。

学校給食における碧南産農産物の使用割合（食材数）

現状値（平成 19 年度）	目標値（平成 23 年度）
29.0%	35.5%以上

資料：給食センター

<参考・国の指標> 21.2%（平成 16 年度）

30.0%以上（平成 22 年度）

<参考・県の指標> 27.7%（平成 17 年度）

35.0%以上（平成 22 年度）愛知県産

食品の安全に関する知識を持つ市民の割合

現状値（平成 20 年度）	目標値（平成 23 年度）
48.5%	55.0%以上

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

(4)「食の情報発信とネットワークづくり」の数値目標



食育に関心を持っている市民の割合の増加
碧南市食育推進ボランティアの登録数

食育に関心を持っている市民の割合

食育を推進し、その成果をあげるためには、先ず市民一人ひとりが食育に関心を持ち、自ら取り組むことが重要です。

食育に関心を持っている市民の割合を増加させます。

碧南市食育推進ボランティアの登録数

市民一人ひとりの主体的な取り組みがより効果的なものとなるよう、その取り組みを支援する人材の育成が必要です。

碧南市食育推進ボランティアの登録を進めます。

食育に関心を持っている市民の割合

現状値（平成20年度）	目標値（平成23年度）
70.1%	90.0%以上

資料：碧南市食育に関するアンケート結果

<参考・国の指標> 69.8%（平成17年度） 90.0%以上（平成22年度）

<参考・県の指標> 64.8%（平成17年度） 90.0%以上（平成22年度）

碧南市食育推進ボランティアの登録数

現状値（平成20年度）	目標値（平成23年度）
0人	20人以上

碧南市食育推進ボランティア...市民一人ひとりが自らの「食」について考える習慣を身に付け、食の安全や食品の選び方等を判断する能力を養う「食育」の推進を図るため、市内で「食育」の推進活動を行っていただくボランティアのこと。